



声玉

水たまりの中に声玉を見つけた。拾って食べたら声域が一オクターブ広がった。夜の河原に立って風上に向かい遠吠える。のどぼとけを震わし新たな僕の声が澄みきった夜に響き渡り風に乗って戻ってくる。大気をゆらす振動は強く、その減衰度もまた立派なものだった。なんて素敵な夜だろう。川向こうに白く光る犬を見た。たちまち人の姿になりこちらにおじぎをしたので、僕は礼にのっとり犬の姿になり返礼をする。遠くの夜で救急車のサイレンが鳴っている。月明かりを吸収した草々が闇を深める。僕らは風下に向かってあらためて遠吠えする。慎重深い二つの遠吠えが風下の奥へ奥へと並び運ばれていく。

メガネ

せっかくだからあなたにメガネを御馳走しましょう。叔母はそういうと卵をからめパン粉をまぶしてじゅうとメガネを揚げた。私は盛り付けを褒め、香ばしさを称え、そっと食卓下の犬に食べさせた。血統の良いオールド・イングリッシュ・シープドックはバリバリと美味そうな音をたててあっという間にメガネをたいらげた。私は犬の頭を撫でながら口元の揚げカスをさっとはらった。

キングサーモン

上流でなにやら騒いでいると思ったら、鮭と熊が戦っていた。よく見ると鮭が小熊を飲み込もうとしていてそれを親熊が助けようとしていた。状況をよくよく見たうえで私はやや劣勢の熊を応援することにした。戦いは互角に引き分け、小熊はなんとか助かった。動物に詳しいわけではないので熊が何熊なのかわからないけど、鮭はおそらくキングサーモンだと思う。ライオンが百獣の王と呼ばれるように、あれがサーモンの王に君臨するキングサーモンなのだろう。いやはやさすぎである。



町内会長

そいつは突然降ってきた。ぼたんぼたんと言葉をたてて地面に落ちる。人々は狼狽した。誰もが言葉を失い、しばらくしてからようやく逃げ出した。僕も逃げようとしたが脚が凍りついたように動かない。あせるほど体が硬直し平衡感覚を失う。思考が絶望の淵に陥りかけたとき、絶望の入り口から町内会長がでてきた。町内会長はすたすとそれが降っている最中へと歩いた。それを捕ったかと思うと、のばして、ねじって、揚げた。次々と降り注ぐそれを掴んでは、むくむくとした指で実に器用に、のばして、折って、くるっとねじった。そしてねじるそばから揚げた。さすが町内会長だと口々に感嘆の声をあげていると、揚げたてのそいつに砂糖ときなこをまぶしたものが配られてきた。人々は高らかに歌った。

そのパン屋へ行くには深い森を抜けなければならない。トシコは黒猪を連れて森に入る。ときどき妖精達がまとわりつくのとトシコは両手のひらを使って潰した。潰すと苦々しい匂いがするがあれこれ話しかけられるよりかはマシだ。シダの葉は湿った空気に呼吸するようにふわふわとその体を上下させる。木々は沈黙を守り森の森らしさを深める。森へ入ってからパン屋につくまで、時間はいつも十分しか奪われない。たとえ一時間道に迷っても、急ぎたいからといって早足で駆けても、それは過程の話であって、森からパン屋まで時間はきっかり十分しか奪われない。それ以上すすんでいた時計の針もパン屋に着く頃には戻っている。横着なトシコはそのことについてさして気にしないことにした。

小さいおじさん

買い物に疲れエレベーター横のソファで休んでいると、膝の上にサスペンダーに蝶ネクタイというこしらえの小さなおじさんが上がってきた。咄嗟の文句を言い逃すともう言い出せなくなっていた。小さなおじさんは膝の上で割方おとなしく、器用にポケットからだしたみかんをむいていた。皮から飛ぶ汁が白いスカートに染みをつくると思ったのだが、やはり文句を言うのが憚った。いつになったら帰るのだろう、首の後ろの贅肉をぼおっと眺めながらどうしたものかと思案した。思い切って脇の下に手を入れておじさんを持ち上げると、同じ大きさのチャウチャウくらいしっとした重さだった。持ち上げても大人しいどころかだらしなく体を弛緩させていた。よくも他人の手の中でくつろげるものだと思えながらサービスカウンターへ届けた。迷子のように、と無防備な受付嬢に押し付ける。先ほどの私のように受付嬢は一言目を逸して受け取った。小さなおじさんは受付嬢の膝の上で丸まり、心なしか私のときよりも嬉しそう体を揺すっていた。憎たらしくて腿のあたりをぎゅっつつねると細く鳴いた。

片山さんは尋ねた。君は明日に行ったことがあるかい？僕は未だかつてないよ。明日に届いたと思ったらいつの間にか今日にすり替わっている。今日は昨日の明日とは言えるけれど、正確には明日ではなく今日なんだ。俺は一度や二度でなくこの正体を探ろうと徹夜したことがある。けれどそれでも明日にたどりつかない。朝方に頭が朦朧とする間にやはり明日が今日になっているんだ。今は永遠に未来に追いつかないし過去にもならない、そんな気になってきて、そもそも今が未来や過去と隣接しているのかも疑わしく思えてくるよ。

バッファローは答える。それは片山さんが未来と今と過去を平行に位置づけそのままの関係性でスライドしているからいけないんだよ。単純に今から未来の方向へ進めば済む話だよ。今から未来へ行く。未来に行けばいいんだよ。片山さんは話が飲み込めずに曖昧な目でバッファローを見返した。バッファローは首を振って鼻をならす。いいかい、君たちの先祖のつくった時間軸に頼りすぎでは駄目だ。今日だって君は二時に待ち合わせをしようと誘った。二時に...、そんなことだから君はいつまでも未来にたどりつかないんだ。僕がお手本を見せるよ。よく見てるんだよ。そう言うとゆっくりと立ち上がり後ろ足を交互に三回ずつ蹴りあげ土埃を十分に舞い上げた。そして一直線に走り出す。大きなスライドで実に力強い走りだった。行く手には時間軸が地面から天へと伸びている。バッファローはスピードを落とさないまま片角を時間軸にひっかけてくるっと方向を変えて未来へと走り去った。



牛とシュジン

シュジンは両手を上下に振りながら、べえべえ、と私に挨拶をする。私は草を食む口を止めてこんにちはと返す。関わらずシュジンは、べえべえ、やら、どうどう、と言うのだから話にならない。人も愛想も良いが頭は悪いのだろう。ときおり、しもふり、もふり、という言葉が発しながらおかしな手つきで背中を触ってくる。そういうとき私は霜が朝日を浴びてきらめくように大事なことに思いが当たるのだが、いつもそれは一瞬のことですぐに曖昧になる。面倒なのでそれをもやもやとしたなかに戻し、知らないふりをする。そして私は草を食みつづける。これが仕事なのだから私は働き者である。一度に食べるような粗野なことはせず、何度か口と胃の中を往復させきちんと咀嚼する。

男とロバ

男はロバと引き換えに焼酎を三本もらった。焼酎を飲みながら失ったロバを恋しく想った。街でロバを見かけてももう自分のロバがないことが悲しかった。働いて買い戻すことを考えたが、男の仕事はロバがいなければ出来ないものであった。男はますます悲しくなって駆けだした。駆けて駆けて何里も行ったころ舌が伸びてきてだんだん呼吸が楽になり、腿の肉は引き締まりふくらはぎは痩せ、ふっさりとした茶色い胸毛を生やした。リズムカルに四本足で細かく走ることが心地よくなったときには、男はすっかりロバになっていた。男ロバは街の人に捕まり荷物を運ぶ仕事に従事した。労働の喜びをねぶりながら男ロバは一生懸命働き思考を失っていった。そうして焼酎四本もの値打ちのある立派なロバになった。

オフクロの味

オフクロは料理が好きだ。好きだと言っても料理方法は、生のほかに煮るか焼くか、それも丸ごと、である。下ごしらえなどももちろんなく、盛りつけもまるで気にしない。丸ごと煮た魚や丸ごと煮た野菜が食卓に並べられる。好きと上手は比例しないものだ。それでもとても楽しそうに料理をするので家族の誰も文句を言わない。私の場合、その料理で育った子供だったので、文句を言わないというより気にする由がなかった。小学校の給食を口にするまで料理とはオフクロのつくるごろごろとしたものだった。そんなオフクロの料理でも少しは手がこんだものがある。なかでもオヤジは蛸にじゃが芋をつめて焼いた料理が殊更に好きだ。手数が多くなってもやはり丸ごとの組み合わせである。私は蛸から出る汁がぐしゃぐしゃしていて余りおいしいとは思わないのだが、オヤジがとてもおいしそうに食べるので、ついついつられて食べてしまう。

